



ピッポ新聞

2012
8
No.263

子どもの本専門店 **ピッポ**

ピッポ古書クラブ

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp



KLMのジャンボ機でアムステルダムまで

送っていたので、自宅から成田までは、小型のザックを背負っただけの比較的身軽な状態でよかったです。よく目にするスーツケースをガラガラ押しながら歩く

7月9日、いよいよスイスへ旅立ちの日だ。搭乗するKLM(オランダ航空)のジャンボ機の出発予定は朝十時四十分。そこで、前日の夕方成田にきて一泊したのだった。というのも、海外旅行は20年ぐらいい前にドイツへ行って以来のことなので、しかも、そのときは人が立てた計画に参加したのであったが、今回は一から十まで自分で計画した個人旅行なのだから、なにことも手探りだから、時間に余裕を持つ必要があったのだ。

スイスへ行ってきたよ！
(その1)
チューリッヒへ無地到着

ことだけは避けたかったのである。あれって、あまりスマートでないものね。しかも、ぼくのスーツケースはけっこうでかくて、KLMのエコノミークラスのスーツケースの許容範囲ぎりぎりのおおきさだった。なにしろ、中にはピッケル、アイゼン、ストック、山靴などのガサバル山道具が入っているのだからね。

朝8時、ホテルのシャトルバスで空港の出発ゲートの近くまで送ってもらった(これも宿泊料金に入っているのだろうな)。ぼくはまず、大きな掲示板で自分の乗る飛行機のゲートナンバーなどを確認した。すると、同じ時間に出発予定の飛行機がいくつかあることに気付いたのであるが、これがどういうことなのか、昨日の夕方飛行場の展望デッキから飛行機の離着陸を見学していたので、だいたい理解できたのである。特に離陸は目の前で見ることができた。ちょうど離陸のラッシュ時間にあたったのか、飛行機が時間にすれば一分間隔ぐらいいで、次から次に目の前の滑走路を飛び発つていくのだった。離陸した飛行機が、車輪を畳み込んだかなとみていると、もう次の飛行機が滑走路を轟音を轟かせて通り過ぎていくのである。それはすごい迫力であった。この迫力が気に入って、ぼくにはわか飛行機ファンになったのである。同じ時刻が表示してあっても、準備ができた飛行機から次々とびたつていくのだから、問題はななのだ。飛行機の5分や10分の遅れなどはなんら問題にないようである。事実、乗った飛行機は予定より15分ほど遅れて飛びたった。でも、この間隔でよく事故が起こらないものだと

感心もした。

昨日のうちにKLMのチケットインカウンターがどこにあるのかを確認してあったので、迷わずその場所に行くことができた。その近くには、自動チケットイン機というのがあったのだが、どうすればよいのかわからない。

パソコンからプリントアウトしてきたeチケット控えというのを手に機械の前でうるうるしていたら、腕章をまいたおじさんが声をかけてくれた。「ちょっと遣り方がわからないのですが」というと、パスポートを出してくださいというので、おじさんにわたしたら、おじさんが機械にパスポートを差し込んだところ、ボーディングパス(搭乗券)が出てきた。そこには自分の名前や搭乗する便名や座席ナンバーなどが載っていた。

これをもって、スーツケースを預けるカウンターのところにいった。順番がきたので搭乗券を見せて「チェックリッヒまでお願いします」といったら、多くの搭乗券を見て、「アムステルダムからチェックリッヒまでのボーディングパスは？」と、おじさんがいたので、(この人はKLMの制服を着ていたがおばさんだった。と言っただけはないのだね、ベテラン係員というのだね。航空会社の窓口の女性がなにも若い女性と決まっているわけではないものね)「機械からはこれしか出てこなかったよ」といったら、「eチケットの控えを見せてください」という。

見せたら、おばさんは、これを見ながらどこかに電話した結果、アムステルダムの、スキポール空港の搭乗口でチェックリッヒまでの航空券が発行されるという。「すみません。システムが少しかわったものですから。荷物は間違いなくチェックリッヒまでおくります」といって、クレームタグをくれた。



成田を離陸して、アムステルダムへ出発

ここがまだ成田空港で、話す相手が日本人で、言葉が日本語だからよいようなものの、これが、アムステルダムやチェックリッヒだったらスムーズにその内容を、ぼくは理解できただろうか？ ちょっと不安を感じながらも、内心ホトとした。

その後は、出国手続きもスムーズで、KL862便に搭乗した。飛行機に乗るのはこれで3度目だったので、物珍しくて、離着陸の様子や外の景色が見えるように(ミラーということ)、飛行機は行きも帰りも

窓側の席を指定していた。

飛行機は新潟県沖からカムチャツカ半島を越え、シベリヤ上空を通過して、その後はロシアの海岸線沿いにヨーロッパまで飛ぶようになった。これは、座席の前のモニターを見ていて分かったことだ。ここには、機外の温度が何度であるかとか、高度何メートルのところを飛んでいるとか、目的地のアムステルダムまであと何キロあり、時間は何時間かかるかとか、表示されるのである。このモニターで、映画や、ゲームもできるとあったが、ぼくはそれを試そうとは思わなかった(やり方もわからないし、乗務員に聞くのもめんどくさかった)。

飛行機が飛び発つ前に、ザックの中からは文庫本とサンダルとカメラを出して脇に置いた。

足首まである軽登山靴をはいていたので、さっそくサンダルに履き替え足を楽にした。これから12時間ほどの席で過ごさなければならぬのだ。これを見ていた隣のおばさんが「そのサンダルに履き替えるのは、とてもいいですね」と、ほめてくれた。ジャンボ機の窓側の席は3席連なっていて、おばさんは通路側に座っていた。真ん中の席は空いていた。おばさんは「真ん中の席は半分ずつ使いますよ」だって。このおばさん(やつぱり御婦人と表現しなければいけないのかな?)は、そうとう旅慣れている様子だった。今回はアムステルダムからベルギーのブリュッセルに行くのだと言っていた。前の座席との間が意外にせまいのはびっくりした。

飛行機は高度9千〜1万6百メートル位を飛んでいるようで、見ていた限りでは1万1千メートルを超えることは一度もなかった。はるか下はシベリヤのタイガ（針葉樹林帯）で、ときどき凍った川や湖を見ることができた。しかし、すぐに下界は雲に覆われて、景色は雲の下に隠れてしまう。ぼくは雲でおおわれて景色が見えなかったり、変化のないタイガの景色を見飽きると、文庫本を読んで時間を過ごした。



エサのような機内食

いるという感じがした。でも残したかというのと、2度とも全部たいらげた。食事の後や、間には飲み物のサービスもあった。ぼくはその都度コーヒーカー水を頼んだ。この飛行機には日本人の客室乗務員が4人いるということであったが、飛行機を降りるまで目にするものがなかった。

眼下の景色が海岸線写すようになってき

機内食は2回配られた。隣のおばさんが機内食の写真を撮ったので、

ぼくも真似をしてカメラに収めた。味の方は、おいしいと言える代物ではなく、包装も含めてぼくは「えれ」

を与えられて

た。どのあたりかわからないが、時には町の上を飛ぶようになると、座席の前のモニターがアムステルダムに近づいたことを教えてくれた。午後2時44分（現地時間）、予定より少し早くスキポール空港に着陸した。

着陸して驚いたのは、その広さだった。着陸した場所からは、空港の建物はおるか、ほかの飛行機の姿さえ見えないのだ。しばらく滑走路を走って（移動して）、ようやく飛行機や空港の建物が見えてきたのだ。飛行機の中からでも、成田と較べてその大きさは、くらべものにならないほど広いことがわかる。外は少し雨が降っているようだった。

ぼくはここで、チューリッヒ行きの飛行機に乗り換え（これをトランスファーというのだそうだ）なのだ。だから、入国審査はパスポートを提示するぐらいだと思っていたのだが、なんとこれが結構厳しいのだ。ザックの中の金属のものや、薬（血圧降下



剤を飲んでい（はあか、ポケットの中身を全部出してカゴに入れることを求められたし、ウエストベルトまで外すように言われ、ボディーチェックも徹底して

いて、つま先までチェックされた。

入国審査を何とかクリアして、乗り換えのゲートを目指した。飛行機の出発ゲートナンバーはeチケットの便名で確認して、どちらに進めばよいかは、頭上に掲げられているにプレート板に表示されていた。これが半端でないくらい多いのだ。A〜Hくらいあり、それぞれ、たとえばCならばそのゲートナンバーは1〜22まである。ぼくのゲートナンバーは「C16」だ、これを目指して歩くのだが、歩けど歩けど目的地に着かない。ようやく「C」が表示が絞られてきたと思ったら、今度は数字によつて、右と左に分かれている。それからようやくC16にたどり着いたのである。

スキポールにも動く歩道というのがあったが、その長さも設置されている数も成田の比ではなかった。このハブ空港は想像を超える大きさがあるようだ。

ところで、ぼくはまだチューリッヒまでの搭乗券を持っていないので、これを早く入手しなければならぬ。とにかく、表示の示すところを歩いていくと、いつしか周りには免税店の建ち並ぶ一角にきた。その近くに成田でも見た自動チェックインの機械が何台も並んでいる場所があった。そこにはKLMの制服を着た係の女性がいた。聞いてみると、パスポートを差し込めばボーディングパスが出てくるという。その通りにやると、チューリッヒまでの搭乗券が出てきた。それには確かにぼくの名前や便名が表示してあった。係の人に出発ゲートの場所を再確認して、これで一安心だ。

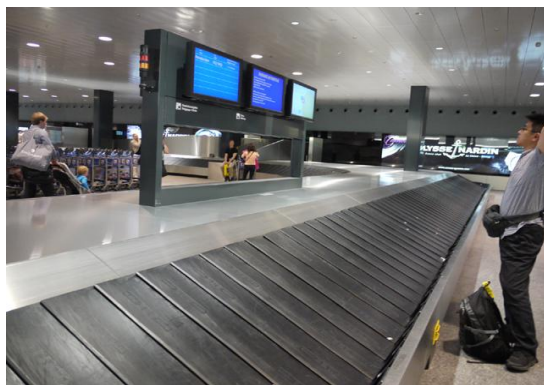
まだ出発時刻まで2時間近くある。

ようやく心にも余裕がでてきたので、数ある免税店を覗いたり、コーヒードも飲みながら時間をつぶそうと考えた。まず目についたのが「ミフィー」のグッズをいろいろ売っている店だった。そういえば、ここはミフィーの生みの親ブルーナーの国、オランダだった。まだ目的地にも到着していないのに、おもしろいものがあつたら孫の土産に購入しようと思つて、いろいろ見回つた。そこで、ちよつとしたものをみつけて購入しようとおもつたのだが、ここであることに気づいたのである。それは、ここオランダはユーロ圏だということだ。したがつて、通貨はユーロでないダメだということだ。目的のスイスはスイスフランだ。ぼくは日本で両替したスイスフランはもっているが、ユーロは持っていなかった。もちろん両替所を探して交換すればすむのだが、それもめんどうなので買うことは断念した。したがつて、コーヒードもあきらめ、ただ見て歩くだけにした。

スキポール空港からチューリッヒ空港まで1時間20分ほどで着くようだ。KL1963便は、ジャンボ機よりも小さな飛行機(中型機というのかな?)だった。今度も窓側の席だったが、ほとんど雲の上を飛んでいて、チューリッヒが近くなつて、ようやく窓から下の景色を見ることができた。チューリッヒ空港も成田よりはかなりでか

い空港のようだった。

到着した場所から地下ケーブル(?)に乗つて(わずかな時間だったが)到着ゲートまで行くようになっていた。入国手続きもいたつて簡単で、パスポートを提示したのかしなかつたのかさえ記憶していない。さすがは観光立国だけのことはある。「ウエルカム精神」が行き届いていると感心したのだが、これがとんでもないぼくの善意の解釈であつたことが、帰国時に思い知らされたのであるが、これはまたこの連載の終わりに書くことにしよう。



荷物は無事出てくるかな?

出てきた。ぼくのスーツケースも無事回つてきたので、一安心だ。

荷物を受け取つた人たちが一定方向に歩

いてゆくの、ぼくもその後が続いた。みんな、いったん空港の建物から出て、道を隔てた向かいの建物に入っていく。SBB(スイス国鉄)の窓口は1階にあつた。

ここで、日本で買った「スイスパス」に駅員に日付を入れてもらわなければ、今日からパスは使えないのだ。窓口でスイスパスとパスポートを提示して駅員に日付を書き込んでもらいスタンプを押してもらつた。

そこで、ぼくはチューリッヒ中央駅行きはどこから出るのか聞いたら、親切に階段を指さし、地下の3番線からだ教えてくれた。階段を降りて行くとすでに列車は停まつていた。乗つた列車は急行で、10分ほどでチューリッヒ中央駅に着いた。

(次号へ続く)

編集後記

長年の夢であつたスイスの山旅を2週間もすることができとても満足です。人間とは情けないもので、自分の思いが実現できれば、そこで感謝して終わればよいものを、さらなる夢を抱いてしまつものなのですね。ぼくの中にはもう、来年もまたスイスに行こうなどという考えが芽生えているのです。おつと、「人間とは」などと、一般化してはいけません。これはあくまでもぼくの欲望でした。長い間ピッポ新聞を休んで、もうしわけありません。当分の間は、「スイス」のことなど、書く材料には事欠きません。お読みいただければ幸いです。